

# Hem21

## NEWS

公益財団法人  
ひょうご震災記念21世紀研究機構  
ニュース

### CONTENTS

- ①～③ 第18回アジア太平洋フォーラム・淡路会議を開催  
情報ひろば
- ④ 被災地の総合的検証をめぐ  
る困難
- ⑤ HAT神戸掲示板
- ⑥～⑧ 人と防災未来センター  
MIRAI

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である  
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

VOL. **66** 平成29年 11月  
(2017)

第18回となるアジア太平洋フォーラム・淡路会議が、8月4日(金)、5日(土)の両日にわたり淡路夢舞台国際会議場(淡路市)で開催されました。テーマは「テクノロジー・カルチャー・フューチャー」。



記念講演

1日目の国際シンポジウム(一般公開)では、200人の参加の下、アジア太平洋地域に関する優れた人文・社会科学領域の博士論文を顕彰する第16回アジア太平洋研究賞(井植記念賞)の授賞式を行った後、4人の講師に記念講演をしていただきました。

石黒浩氏(大阪大学大学院基礎工学研究科教授、ロボット工学者)、濱口秀司氏(ビジネスデザイナー)は、「クロストーク 未来社会を支える知的システムの実現」と題し、まず、石黒氏が「ロボットを作っていると、アイデンティティーとは何かと考えさせられる。人間を映す鏡として、ロボットそのものが文化になるのではないか。日本のように人口が多く、人口密度も高く、平和で貧富のない世界は奇跡に近いが、これが日本でロボットが強い理由だ。ロボットは日本の重要な文化であり、それが人類の文化に発展していく未来が見えると楽しい」と述べました。

続いて、濱口氏が「テクノロジー・カルチャー・フューチャーについてシステムチックに理解しなければならない。われわれはカルチャーに対して論理のメスを入れなければならないタイミングにある。また、現時点で知的システムと人間の関係に結論を求めない方が

## 第18回アジア太平洋フォーラム・淡路会議を開催

いい。われわれが愛情を持って育てないといけない」と述べ、「カルチャーに理論を」「知的システムに愛情を」の2点を提言しました。

最後に両氏のクロストークが行われ、「ビジネスの世界では、インターフェースの戦いが起きている。世の中のインターフェースのうち、移動上のインターフェースはAppleとGoogleに牛耳られた。残された、固定環境のインターフェース、半固定環境のインターフェースの2つで、日本を含めたアジアのどこかの国が頑張らないといけない」「アメリカやヨーロッパだから頭打ちになっているところがあって、日本のような文化からこれまでの認識を超えたインターフェースが作られる可能性があるのではないか」といったことが語られました。

太刀川瑛弼氏(NOSIGNER代表取締役、慶應義塾大学大学院SDM研究科特別招聘准教授)は、「未来のデザインを生み出すための、過去に回帰するデザインの話」と題し、「新しいものを作るのが必ずしもデザイナーの仕事ではなく、どういうものにそのデザインをひも付けていくのかという関係性の方が極めて大事である。『どう関係をつくっていくのか』は『どう形を作っていくのか』と不可分であり、この両者を考えることがデザインである」「流動性の無い領域と領域の間に回路を流すことにより、新しい結合が生まれる。ムーブメントや文化ができるときは、流れていないところの堰をどうやって切るのが大きなテーマになる。流動を生み出すことが、恐らく私たちが『イノベーションを起こす』と呼んでいる行為なのだ」と述べました。その上で、「人間は簡単に進化することはできないが、何かを作ることができる。それは一歩でも進もうという人間の本能だ。その中でどのような方向に進化したいのか、また、どのような技術を使ったらそれが可能になるのかを考えるのが、私たち人間なのである」と結びました。

伊藤博之氏(クリプトン・フューチャー・メディア株



基調提案

式会社代表取締役)は、「初音ミクがなぜ世界で支持されるのか」と題し、まず、「初音ミクは、人間の歌声を合成する技術(VOCALOID)を用いたソフトウェアだ。初音ミクが知名度を得たのは、リリース前に動画共有サイトが始まっていたことが大きい。初音ミクで作った曲の発表先は、ニコニコ動画やYouTubeなどビジュアルを伴うインターネットメディアが中心であった」「また、ソフトウェアにキャラクターをつけていたが故に、一つの作品をモチーフにして派生的にいろいろな作品が生まれてくるという『創作の連鎖』が、動画共有サイトを中心に広がっていった。こうしてソフトウェアとしての初音ミクに加えて、キャラクターとしての初音ミクというものも知られていった」と述べました。その上で、「このようなムーブメントを日本から発し、世界に対して大きくインパクトを与えているということに、面白みと誇りを感じている」と述べました。

2日目は、淡路会議メンバー等60人(他に一般から5人の傍聴者)の参加の下、フォーラムを開催し、3人の講師に基調提案をしていただきました。

山口高平氏(慶應義塾大学理工学部教授)は、「人とAIが協働する未来社会」と題し、「学習にディープラーニングという手法を使ったAlphaGoというAIが、世界ランキング2位のLee Sedolというトッププロ棋士に勝ったが、AIは人の知的な振る舞いをシミュレートするソフトウェアであり、業務や使うAIの技術によってその限界などがかなり変わってくる。従って、AIと大きくくりせず、細分化したAIの特徴を理解して、人との関係を考えるべきだ」と述べました。その上で、「人とAIの協働社会に向けては、職業単位で考えるのではなく、業務プロセス単位で考えるべきだ。そうすると、人が得意とすることと、AIが得意とすることで仕事を分けることができる。ヒト・モノ・カネ・情報が4つの経営資源といわれているが、AIを第5の経営資源と考えてトータルに考えていくことが必要ではないか」と提案しました。

吉田慎一氏(株式会社テレビ朝日ホールディングス代表取締役社長)は、「メディア激動と社会の変容—マスメディア再定義の時代」と題し、「IT技術やソーシャルメディアなどの発展で、若い世代のテレビ離れ、新聞離れが進む中、新聞・テレビもインターネット事業に進出している。一方、メディアが非常に相対化されてきて、既成のマスメ

ディアがone of themになり、それとは別に巨大な情報の流れが社会の中で出てくると、社会が断片化されてくる。フェイクニュースやメディア不信という問題もある」と現状を述べました。その上で、「報道という機能について再定義をしなければならない。また、民主社会の共通の情報基盤をどうするかということは、真面目に論議しなければならない。社会での情報流通、情報基盤をインターネットプラットフォームに任せておいていいのか、どのように任せるかという問題は、フェイクニュースのファクトチェックの問題と並んで、20世紀型マスメディアに限らず社会を考える上で重要な問題ではないか」と提案しました。

塚本昌彦氏(神戸大学大学院工学研究科教授)は、「ウェアラブル・IoTが切り拓く未来」と題し、実際にHMD(Head Mounted Display)を装着して登壇。まず、「ここ50年でコンピューターは非常に小さくなり使い方が変わってきた。最初は軍事や科学技術計算用だったのが業務用になり、個人用になり、スマホになった。さらに小さくなると、人が身に付けて利用するウェアラブル(wearable computing)の時代が来る。また、小さくなったコンピューターを物が使うというのがIoT(internet of things)だ。スマホ以上に小さくなったコンピューターは、実空間で使うというのがポイントだ。まだ普及していないが、応用分野は幅広く、ヘルスケア、スポーツ、観光業、農業、医療・介護、警察・警備などの分野でトライアルが行われている」と述べました。最後に、「ウェアラブル・IoTによる実空間ファーストな世界を推進しよう」「来年の淡路会議では皆HMDを装着して参加しよう」「インプラント、サイボーグのビジネスは日本から立ち上げよう」「私は15年以内にサイボーグになる」と4つの提案をして締めくくりました。

基調提案の後、参加者は、「テクノロジーにける未来」「カルチャーにける未来」「テクノロジーとカルチャーの融合にける未来」の3つの分科会に分かれ、それぞれのテーマで活発な討論が展開されました。

午後からの全体会では、冒頭に分科会での討論の概要について各分科会座長から報告をいただいた後、参加者全員でさらに議論を深め、最後に阿部茂行氏(同志社大学政策学部教授)から総括と謝辞が述べられ閉会しました。



全体会

■国際シンポジウム(8月4日)

◆記念講演

コーディネーター: 窪田 幸子(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)

- ①クロストーク 未来社会を支える知的システムの実現  
講師: 石黒 浩(大阪大学大学院基礎工学研究科教授、ロボット工学者)  
濱口 秀司(ビジネスデザイナー)

- ②未来のデザインを生み出すための、過去に回帰するデザインの話

講師: 太刀川 瑛弼(NOSIGNER代表取締役、慶應義塾大学大学院SDM研究科特別招聘准教授)

- ③初音ミクがなぜ世界で支持されるのか  
講師: 伊藤 博之(クリプトン・フューチャー・メディア株式会社代表取締役)

■フォーラム(8月5日)

◆基調提案

コーディネーター: 村田 晃嗣(同志社大学法学部教授)

- ①人とAIが協働する未来社会  
講師: 山口 高平(慶應義塾大学理工学部教授)
- ②メディア激動と社会の変容—マスメディア再定義の時代  
講師: 吉田 慎一(株式会社テレビ朝日ホールディングス代表取締役社長)
- ③ウェアラブル・IoTが切り拓く未来  
講師: 塚本 昌彦(神戸大学大学院工学研究科教授)

座長: 中尾 優(特許業務法人有古特許事務所所長)  
第2分科会「カルチャーにかける未来」

座長: 佐竹 隆幸(関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授)

第3分科会「テクノロジーとカルチャーの融合にかける未来」  
座長: 矢崎 和彦(株式会社フェリシモ代表取締役社長)

◆全体会

コーディネーター: 片山 裕(神戸大学名誉教授)

◆総括と謝辞

阿部 茂行(同志社大学政策学部教授)

◆分科会

第1分科会「テクノロジーにかける未来」

情報ひろば

兵庫県こころのケアセンター

平成29年度第2期「こころのケア」研修の受講生募集

「こころのケア」に携わる保健・医療・福祉・教育等の分野で活動されている方を対象に、各種課題への対処法等について学ぶ「専門研修」を実施しています。

来年1月から2月にかけて実施する研修の受講生を次のとおり募集します。ぜひご参加ください。

▶研修概要

区分	コース名	期 間	定員	対 象	受講料 (資料代等)
専門研修	①消防職員のための惨事ストレスの理解と予防	1月25日(木) 26日(金) (2日間)	35人	消防職員	3,500円
	②対人支援職のためのセルフケア	1月31日(水) 2月1日(木) (2日間)	35人	保健・医療・福祉関係の対人支援業務従事者(保健師、ケースワーカー、各種相談員、福祉施設指導員等)、教職員、スクールカウンセラー、保育職員等	3,500円
	③発達障害とトラウマ	2月8日(木)	35人	こども家庭センター(児童相談所)職員、福祉事務所職員等児童虐待関係職員、保健所職員、教職員、スクールカウンセラー、保育職員等	2,500円
	④子ども達のいじめのケア-加害と被害の連鎖-	2月15日(木)	35人	教職員、スクールカウンセラー、教育委員会職員、こども家庭センター(児童相談所)職員、いじめ相談窓口の相談員、保育職員、児童福祉施設職員、司法関係職員	2,500円

▶場所=兵庫県こころのケアセンター(阪神「春日野道」駅から南へ徒歩約8分)

▶申し込み方法=受講申込書(※)に必要事項を記入の上、郵送、FAX、Eメールで下記までお送りください。申し込み多数の場合は、各研修開始日の1カ月前(前月の同じ日)の17時を期限として、初めて受講の方を優先の上、抽選で決定します。

※当センターホームページからダウンロードできます。

●申し込み・問い合わせ

兵庫県こころのケアセンター 研修情報課

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2

TEL 078-200-3010 FAX 078-200-3017 Eメール kensyu@j-hits.org http://www.j-hits.org/

# 被災地の総合的検証をめぐる困難



主任研究員 高森 順子

当機構の研究プロジェクト「東日本大震災復興の総合的検証—一次なる大災害に備える」は、東日本大震災で被災した東北沿岸市町村の復興計画の策定のプロセスの検証、および発災から現在に至るまでの復旧・復興状況の検証を試みるものである。昨年度から始まった調査研究は、岩手、宮城、福島の前3県の沿岸自治体を訪ね、首長や行政職員の方々を中心にヒアリング調査を行い、現場の声から被災地の「いま」をつかむことが主たる調査方法となっている。現在まで、東北の沿岸自治体8市町に対してヒアリングを終えたところである。

平成28年度から3年間という時間的制約の中で、東北被災地の「総合的検証」を行うことは、非常にチャレンジングな試みである。①東日本大震災の被災地が広域かつ甚大であったこと、②津波被災に加え、原発被災が多大な影響を及ぼしていること、③復旧・復興が現在進行形であり、刻々とその状況が変化していることが、被災地の全体像をつかむことを困難にしている。そこで、本稿では、被災地を総合的に検証することの「困難さ」を紹介することを通じて、被災地の現状の一端をお伝えできればと思う。

上述したように、私たちの研究プロジェクトは、現地の行政職員の方々への聞き取りが主たる調査方法である。そのため、聞き取りができなければ、総合的検証のための素材がないということになる。これまで、岩手県3市（陸前高田市、釜石市、宮古市）、宮城県3市町（南三陸町、東松島市、石巻市）、福島県2市町（南相馬市、新地町）に調査協力をお願いし、各市町の首長および行政職員の方々へ聞き取りを行った。どの市町も復旧・復興のただ中にあり、応援職員の協力をもってしても人材が足りないような状況の中で、調査を受け入れるために多くの職員と時間を提供してくださった。つまり、被災地の調査研究はいかなる研究配慮をもってしても、現場の人びとの手を煩わせてしまうことになるのである。総合的検証は、東北沿岸被災地の復興や、未来の被災地の復興に資するために行うものであるが、その研究プロセスの中では、現場の手を煩わせてしまうことは避けられない。被災地の調査は、そのジレンマと向き合いながら進めることになる。

本年度、福島県富岡町が調査先として挙がっていたが、複合的な事情により、調査は来年度に持ち越しとなった。富岡町は、今年4月に原発事故に伴い設定された避難指示区

域が解除となったばかりであること、今年8月に町長選挙が控えていたこと等があり、町側は調査受け入れを最後まで検討していただいたが、延期せざるを得ない状況となった。現在、富岡町に帰還した住民は128人とどまっており、それは現在の住民登録者数1万3,441人の約1%である（5月1日現在）。富岡町をはじめとして、原発被災の影響が多大な市町村においては、復旧・復興のプロセスを検証する段階というよりむしろ、ようやく復旧・復興を具体的に検討し、進めていくための最初のステップに立てたというのが実態であろう。

当研究プロジェクトの委員でもある立命館大学准教授（兼福島大学客員准教授）の丹波史紀氏は、今年9月に福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター」の調査グループ代表として、双葉郡7町村の住民へのアンケートの中間報告をまとめた。同センターはその結果をウェブ等で公開することを予定しているが、本稿では先行報道された結果をご紹介します（毎日新聞9月9日、朝日新聞9月10日報道より）。それによると、住民の約半数以上の55.5%が現在の職業を「無職」と答えており、住民の生活復興において、特に就労、なりわい支援が必要不可欠であることが浮き彫りになった。また、現在の生活設計の手立てについて複数回答で尋ねたところ、「賠償金」が56.4%で最多、「年金・恩給」が50.7%で続き、「勤労収入」は32.7%だった。この結果もまた、なりわいの再生が進まぬ中で、賠償金等で生活費を工面している様子がかがえる。そして、将来の自分の仕事や生活への希望については、「大いに希望がある・希望がある」は計16.1%だったのに対し、「あまり希望がない・まったく希望がない」が計50.4%と半数を占めた。

避難指示解除によって、ようやく復旧・復興の歩みを進める最初のステップに立った福島県富岡町をはじめ、原発被災の影響が多大な自治体は、岩手や宮城の沿岸市町村とは異なる困難を抱えている。しかしその一方で、上記で紹介したアンケート調査で浮き彫りとなった「なりわい」の問題は、東北沿岸被災地全体に共通した課題ともいえるだろう。広大な被災地を比較研究することで、各地域の特個的な状況を浮き彫りとするとともに、共通の課題を抽出することができれば、今後の被災地復興の一助となるのではないかと。今後も現場で汗を流す人々の協力を仰ぎながら、被災地の総合的検証を進めていきたい。

## 兵庫県立美術館

### 特別展

### 「大エルミタージュ美術館展 オールドマスター 西洋絵画の巨匠たち」

ロシア帝政時代の首都、 Санктペテルブルクにあるエルミタージュ美術館は、絵画作品約1万7,000点を含むコレクション310万点を誇る世界有数の美術館です。本展は、この膨大なコレクションの中でも特に充実している16世紀ルネサンス、17・18世紀バロック、ロココの時代に活躍した「オールドマスター」の絵画85点を紹介します。「昔日の巨匠」を意味する「オールドマスター」とは、西洋美術の歴史において揺るぎない評価を得た作家たちのことです。西洋美術史に燦然と輝く巨匠たちの優品を堪能できる、またとない機会です。



ウィギリウス・エリクセン《戴冠式のロープを着たエカテリーナ2世の肖像》1760年代  
©The State Hermitage Museum, St Petersburg, 2017-18

■会期=2018年1月14日(日)まで

■観覧料=一般1,600円、大学生1,200円、70歳以上800円、高校生以下無料

### 県美プレミアムⅢ

### 小企画「JAPAN KOBE ZEROの軌跡」

本展は、神戸の前衛的な美術グループ、「JAPAN KOBE ZERO」の活動に焦点を当てます。同グループは、古川清をリーダーとして、榎忠、松井憲作たちによって1970年に結成されました。もともとデッサン教室での活動でしたが、その中から先鋭的な表現を行う動きが生まれました。その活動の軌跡を、写真や映像、記事などの資料によって紹介します。



《白布400 m》1972年

### 特集「絵画のふしぎ～県美・絵画・名品選～」

「絵画」に描かれたものは現実なのか、虚構なのか、「絵画」というメディアで画家たちは何を表現しようとしてきたのか。絵画をめぐるさまざまな問いを、主題、表現、技法、素材といった観点から考えます。当館所蔵の日本の近・現代絵画を通して「絵画」に潜む謎とふしぎに迫ります。



榎倉康二《Figure-No.35》1984(昭和59)年

■会期=2018年1月21日(日)まで

■観覧料=一般500円、大学生400円、70歳以上250円、高校生以下無料

◎休館日=月曜、年末年始(12月31日、1月1日)

◎開館時間=10時～18時(特別展開催中の金曜・土曜は20時まで)

※入場は閉館の30分前まで

TEL 078-262-0901(代) <http://www.artm.pref.hyogo.jp/>

## JICA関西

### ◆食べることから始める国際協力!

### JICA関西食堂の月替りエスニック料理

JICA関西1階の食堂(カフェテリア方式)は、どなたでもご利用できます。完全禁煙で、安心して料理を楽しめ、子供椅子もご用意していますので、お子様連れも歓迎です。大好評の月替りエスニック料理の12月はラオス料理です!ぜひ、お気軽にお立ちください。メニューの詳細と写真については、こちら→ <http://www.jica.go.jp/kansai/office/restaurant/index.html>



写真は11月のネパール料理

■営業時間=(昼)11時半から14時まで (夜)17時半から21時まで

※各終了30分前ラストオーダー

■定休日=年中無休(年末年始を除く。)

◎問い合わせ

JICA関西(独立行政法人国際協力機構関西国際センター)市民参加協力課

TEL 078-261-0384 FAX 078-261-0357

Eメール [jicaksic-event@jica.go.jp](mailto:jicaksic-event@jica.go.jp)

その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック!

→ <http://www.jica.go.jp/kansai/>

## 日本赤十字社 兵庫県支部

### ご協力お願いします 「NHK海外たすけあい」キャンペーン

12月1日(金)～25日(月)

日本赤十字社が行う海外たすけあいは、紛争や災害などの困難に直面する人びとを支援するキャンペーンです。

日本赤十字社では苦しんでいる人の力になりたいという思いを持つ日本の寄付者と、世界各国の支援を必要としている人々をつなぐ橋渡し役となるよう、苦痛を軽減するために必要な資金の獲得と、本キャンペーンを通じた日赤の人道的使命と国際活動の理解の促進を図ります。あなたの支援が、世界で苦しむ命を救います。海外たすけあいへご協力をお願いします。



海外たすけあい特設サイト

→ <http://jrc-tsudukeru.jp/>



◎問い合わせ

TEL 078-241-8921

赤十字 兵庫 検索



日本赤十字社 兵庫県支部  
Japanese Red Cross Society

思いに色を、カタチを与える

写真集・詩集・自費出版の  
お問い合わせは

神戸新聞総合印刷  
神戸新聞総合出版センター

<http://www.kobnenp-printing.co.jp/>

## 平成29年度秋期 災害対策専門研修マネジメントコースの実施結果

人と防災未来センターでは、地方自治体職員などを対象とした「災害対策専門研修」マネジメントコースを平成14年度から実施しています。当該コースは、災害対策実務の中核を担う人材の育成を目的とし、阪神・淡路大震災の教訓を学習することを重点としつつ、最新の研究成果も取り入れ、能力に応じた体系的・実践的なカリキュラムです。これまでに、延べ2,787人が受講し、受講生から高い評価を得ています。今回の秋期研修においては、中堅職員を対象としたエキスパートA、エキスパートBおよび首長を補佐する防災監等を対象としたアドバンスト／防災監・危機管理監コースの3コースを実施しました。

アンケートでは、「発災後の初動期、応急期、復旧・復興期のお話を一連の流れで講義いただいたので、復興期の理解が深まった」「経験されたことを講義に反映しているので、大変参考になった」「すべてにおいて、内容が濃く、素晴らしい講師の先生の方々の講義を受けることができた。学んだことを無駄にせず、必ず活用していきたい」「防災部局以外との連携について重要性を理解できた」「危機管理監としての心得と対応の姿勢を学ぶことができ、有意義だった」「高名な先生の講義を受講できて大変よかった。第一線でご活躍されているだけあって、中身の濃い講義で聞き応えがあった」等の意見をいただいています。講義、演習による知識向上だけでなく、受講者間の交流を通じて防災担当者の全国的なネットワークが一層強まりました。

コース名	日程	受講者	修了者
エキスパートA	10月10日(火)～13日(金)	27人	26人
エキスパートB	10月17日(火)～20日(金)	25人	25人
アドバンスト／防災監・危機管理監	10月26日(木)～27日(金)	17人	17人
合計(延べ)		69人	68人



市民社会ワークショップ（エキスパートA）



災害対策本部の空間設計演習（エキスパートB）



危機対応組織論（アドバンスト／防災監・危機管理監）



行政対応特論②（アドバンスト／防災監・危機管理監）

## 減災報道研究会を開催しました

人と防災未来センターでは、9月26日(火)に「減災報道研究会」を開催しました。この研究会は、災害時に連携すべき報道機関と行政機関が互いに理解し、協力関係を構築しておくことが目的で、19回目の開催になります。

今回は、「九州北部豪雨の被災自治体における広報・報道対応について～大分県日田市における対応から～」と題し、甚大な被害を受けた大分県日田市の災害対策本部において、行政広報や報道対応に当たられた市職員と、自治体との情報共有や連絡要員派遣調整などを担当された県職員を話題提供者としてお招きしました。また、大分局へ応援派遣され、被災者の生活支援情報を担当された放送局の方から、被災者のための報道の取り組みなどについてお話をいただきました。

被災地の方々からのお話を伺うとともに、私たちが被災地のためにできること、また、災害に備えて報道機関と行政機関(市町村および府県)で準備しておくべきことなど、参加者も意見交換に加わり、活発で熱心な議論が行われました。

報道機関関係者、自治体職員、研究者等55人の参加があり、減災報道への意識の高まりを感じました。



講師との質疑応答の様子



多くの報道機関関係者、自治体職員、研究者等が参加

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

### 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

観覧案内・予約 / TEL 078-262-5050 <http://www.dri.ne.jp/>

#### 開館時間

9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)  
 ※7月～9月は9時30分～18時(入館は17時まで)  
 ※金曜、土曜は9時30分～19時(入館は18時まで)

#### 入館料金

大人	大学生	高校生／小・中学生
600円(450円)	450円(350円)	無料
[障がい者]		
大人	大学生	高校生／小・中学生
300円(100円)	200円(50円)	無料
[70歳以上の高齢者] 300円(200円)		

※( )は20人以上の団体料金  
 ※毎月17日(休館日の場合は翌18日)は入館無料

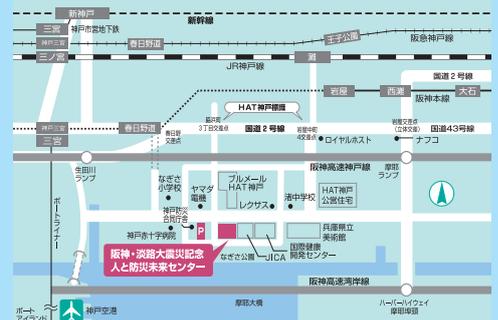
#### 休館日

毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日  
 ※平成30年は1月2日も休館です  
 ※ゴールデンウィーク期間中(4月29日から5月5日まで)は無休  
 ※資料室の開室日についてはホームページでご確認ください

#### 交通

- 鉄道**
- ・阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
  - ・JR「灘」駅南口から徒歩12分
  - ・阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分
- バス**
- ・三宮駅前から約15分
- 車**
- ・阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
  - ・阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
  - ・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分

●有料駐車場あり ●バス待機所(予約制/無料)あり



## 「ALL HAT 2017」を開催しました

地元のまちづくり協議会や小中学校をはじめ関係機関が連携し、HAT神戸の一体化を高め、安心・安全なまちづくりやにぎわいの創出、防災意識の向上を図るため、「ALL HAT 2017」(防災訓練)を昨年度に引き続き10月28日(土)に開催しました。

「朝9時7分に兵庫県南東部を震源とするマグニチュード7、神戸市内で震度6強の地震が発生」という想定「シェイクアウト」から訓練を開始。地域住民を中心に1,400人余が参加する大規模な訓練となりました。

人と防災未来センターとなぎさ公園を会場とした「減災チャレンジ体験ラリー」では、国土交通省近畿地方整備局の海洋環境整備船の船内見学や、自衛隊兵庫地方協力本部の災害派遣展示・制服試着、神戸市消防局の消防車両展示・ポンプ車放水体験、神戸市水道局とまちづくり協議会による応急給水チャレンジ、日本赤十字社兵庫県支部の心肺蘇生とAED講習、地元のまちづくり協議会合同での「炊き出し」など多数のプログラムが実施され、あいにくの雨模様でしたが家族連れをはじめとした地域住民ら約500人にお越しいただきました。

午後からは「HAT神戸住民減災リーダー研修」として、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科進行のもと、避難所運営ゲーム「HUG」が行われ、緊急避難場所に指定されている神戸市立渚中学校を会場に、実際に災害が起きたとき避難所となる場所で何が起こるのか、どのように避難所運営をするのか等を参加者自らが訓練形式で体験。実際に起こり得るであろう問題点など、具体的な意見交換なども行われました。



日本赤十字社兵庫県支部によるAED講習



自衛隊兵庫地方協力本部の制服試着



人と防災未来センター友の会による防災楽習迷路



HAT神戸住民減災リーダー研修



**Hem21 NEWS**  
vol.66

平成29年11月発行

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構  
〒651-0073  
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2(人と防災未来センター)  
<http://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部

TEL 078-262-5580  
FAX 078-262-5587

●研究戦略センター

▶研究調査部  
TEL 078-262-5570  
FAX 078-262-5593

●人と防災未来センター

TEL 078-262-5050  
FAX 078-262-5055

▶学術交流部

TEL 078-262-5713  
FAX 078-262-5122

●こころのケアセンター

〒651-0073  
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2  
TEL 078-200-3010  
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・  
ご感想を機構までお寄せください